

**大月の小山田家による歴史的背景**  
**—小山田信茂は何故武田勝頼を裏切ったか？—**  
**—岩殿城下庶民を救ったのか？—**  
**—大月市民の特性について—**

2008年5月2日

大月市賑岡町浅利

折笠公德

## 目次

- 【1】はじめに
- 【2】小山田家と武田家の関係
- 【3】武田家について
  - (1) 武田信玄の五つの疑問
  - (2) 信玄と太郎義信との確執
  - (3) 信玄と四郎勝頼との関係
  - (4) 信玄と諏訪家との関係
  - (5) 勝頼の人間像
- 【4】武田家滅亡の背景とその場面
  - (1) 武田家滅亡の主原因
  - (2) 滅亡の背景とその場面
- 【5】小山田家について
  - (1) 小山田家とは
  - (2) 功績
  - (3) 円通寺再興
  - (4) 岩殿城築城
  - (5) 小山田氏の財源
  - (6) 最後の城師 小山田信茂
  - (7) 郡内を救った小山田信茂
  - (8) 信茂自害後の一族
- 【6】岩殿城下について
  - (1) 岩殿山周辺の地質
  - (2) 相馬将門伝説
  - (3) 岩殿城の総構え
  - (4) 岩殿城と在地豪族
  - (5) 小山田氏の治績
  - (6) 残された郡内武士団
- 【7】大月市民の特性について
- 【8】最後に
- 【9】参考文献

## 【1】はじめに

現在、私が住んでいる山梨県大月市は岩殿山頂に関東三大名城の岩殿城（今は跡地）を有している。

その城主小山田家は名家であるが、武田信玄の四男勝頼を裏切り自害させ、武田家を滅亡させた張本人と言われている。

是非ともその理由とそのことに大きく影響を受けている大月市民の特性について知りたい。

私は15年前にこの大月の地に引っ越してきた。

その頃からここに住む人たちの土地柄の特性みたいなものを感じていた。

個人個人は皆違う人たちであるが、全体を括るとこのような人たちと言うことができる。

これは一体何なのだろうと思いつけてきた。最近何となくわかってきた。

①地理的背景

②歴史的背景

③血統的背景

がある。

今回はその中で歴史的背景について調べ考えてみたい。

## 2】小山田家と武田家との関係

両氏は数回の婚姻により血脈が相つながっている。武田十三代信昌夫人が郡内（大月）から嫁いだ直後、骨肉合い喰む争いとなった。

正室と側室の子供同士の争い。

信昌は息子信恵の無事成長を祈って長生寺建立（都留市羽根子）。

その後十八年間武田兄弟が血を流しあう。

その間、北条早雲が吉田まで侵略し、城山と小倉山に城を築く。

北条早雲の重臣葛山氏の口利きで和睦が成立。

ここで小山田氏はこの時点で滅亡する運命にあったが、後継者の小山田信有二十三才が立派な武人であった。

この頃の小山田氏の勢力は武田氏に匹敵するものであった。

1548年村上義清を田の口城に攻めた時、信玄重傷のため小山田信有を代将として出陣させた。これは信玄一生に一回だけのことであり、小山田信有を相当信頼している証拠である。

その嫡男小山田信茂は14歳時、信玄の長女が小田原の北条氏に嫁ぐ総指揮をとった。両国を合わせると三万人の総大将となる。

1576年信玄大葬儀のおりには恵林寺には武将五百人が剃髪低頭した。

その中で小山田信茂は葬列第四位、家臣一番の榮譽に輝いた。

小山田三代が武田三代と同じ時期に数々の殊勲に輝く実績を収めたのは小山田氏の実力を名実共に支える裏付けとなった郡内特有の資本力にある。

その数値は膨大なものであった。

小山田三代とは、越中守信有、出羽守信有、左衛門太夫信茂である。

### 【3】武田家について

#### (1) 武田信玄の五つの疑問

武田信玄には大きく5つの疑問があるといわれている。

このことが早期武田家の滅亡に繋がっている。

- ①偉大な父信虎を追放したこと。
- ②騙し討ちにした諏訪頼重の娘御寮人を側室にしたこと。
- ③適子義信を殺害したこと
- ④織田信長と二度も縁組したこと。
- ⑤遺言で病死後三年間は喪を隠し、勝頼を正式の跡目にしなかったこと。

#### 塩山 恵林寺 (武田家菩提寺)

長い生い茂る木々の間の広い道を行くと山門がある。

その手前の桜は鮮やかであった。まだ桜が咲くには早い時期であったが、その桜だけが大きくきれいに咲いていた。

さすが信玄公お菩提寺である。威厳とおちつきと美しさを持っている。

「風林火山」を寺にするとこの様になるのであろう。

寺のとなりに信玄公宝物館がある。各々の貴重な資料がある。

本物の風林火山の孫子の旗が飾られている。

勝頼は1576年(天正4年)に信玄公の葬礼をこの恵林寺で行った。

道師は快川紹喜。快川はのちに織田・徳川連合軍が甲府へ殺到してきた時、寺の屋根の上で自ら焼死した。

「心頭滅却すれば火もまた涼しい」と唱えたという。



### 塩山 菅田天神社 (武田家重宝所蔵)

塩山駅近くにあるひっそりとした神社。  
人っ子一人いない。  
どことなく威厳のある存在感のある神社であった。  
新羅三郎義光以来、武田家代々の重宝とされてきた  
『盾無鎧』を所蔵。



### (2) 信玄と太郎義信との確執

太郎義信は人並みすぐれて気骨のある逸材に育ち、自他共に認める信玄の跡継ぎであった。妻は今川義元の娘、今川夫人であった。  
武田家には親子が相争う「負の体質」があった。  
義信殺害は信玄自らの寿命をも縮め領国を滅亡に導く発端なった大事件である。

### (3) 信玄と四郎勝頼の関係

#### ① 武田家と諏訪家

しばらく上社諏訪氏と下社金刺氏との対立が続いた。  
諏訪頼重と武田信虎は同盟軍を結んだ。  
諏訪頼重は関東管領上杉憲政と単独講和を結んで領土分割協定を締結した。  
その後信玄の怒りをかい、自害。  
その子供、寅王丸は信玄を憎み捕らえられて殺害されたという。  
諏訪惣領家の処遇について考慮した結果、頼重の子供を側室に迎え  
その子に相続させる事にした。

## ②勝頼と信玄の遺言

信玄は御寮人を側室に迎えたのは絶世の美女だったからではなく、諏訪郡を統治する手立てとして神長の意見に心を強く動かされた。

信玄はあえて勝頼の子を信玄の養子にした。武田信勝である。

勝頼は甲府ではよそ者であった。

勝頼は強すぎる大将、勝頼の形儀は信玄よりも謙信に似ている。

長篠戦で信玄が大切にしていた武功派の家老衆が消え去った。

## (4) 勝頼の人間像

### ①悲しきかな勝頼

諏訪勝頼のまま信玄の死を向えた。

数奇な星の下に生まれた勝頼にとって唯一無念だったのは信玄の子でありながら甲州の人々から疎外されたことであろう。勝頼は甲州の人々の冷ややかさ、自分の求心力のなさをいやというほど思い知ったに違いない。

### ②武田勝頼をめぐる女たち

#### ◆叔母 ねね御寮人の死 享年16歳

ねね。頼重の正室として嫁ぐ。現夫人（諏訪御寮人母）を退けての結婚である。

人には避けることのできない、生まれながらの運命があること。

次第に諏訪への愛着を深めていった。

頼重自刃。寅王丸を錦の御旗とした。

身を裂かれる程の乱の中で死んだ。

#### ◆母 諏訪御寮人

輝くばかりの美しさ。

父頼重の切腹後信玄の側室となった。

勝頼はそんな母の諏訪に寄せる深い思いを注ぎ込まれながら育った。

勝頼十歳、母の死。母二十三歳。

#### ◆妻 遠山夫人

勝頼十七歳で遠山城主となる。

織田信長の姪が花嫁。

信玄が持っている木曾と境界になる

勝頼はこの初々しい花嫁を双手で受け止めいつくしんだ。

信勝を産み落とすとそのまま亡くなる。享年16歳。

#### ◆妻 北条夫人

勝頼三十二歳。北条氏政の妹が勝頼を訪ねてきた。十四歳。

勝頼は心底愛した。

北条夫人は勝頼の人間味に触れた。

## 諏訪大社 （勝頼の生まれ故郷）

諏訪大社は諏訪湖を隔てて南に上社、北に下社が鎮座する。

上社は諏訪市の本宮と茅野市の前宮、下社は下諏訪町の春宮と秋宮に分かれています。この四社を合わせて諏訪大社となる独特の形式である。

源頼朝、武田信玄及び勝頼など多くの武将の信仰が厚かった。

古来日本では、神は木や石や山などによると信じられて来た。ちなみに神社の”社”という字は実は”この神がよる木”という意味の言葉。諏訪大社は古い神社だけに、この古代信仰の形を今も伝えていて、本殿はない。その代わり神がやどるといふ御神木が社殿の奥に立ち、それを守るかのように4本の”御柱”が社殿の四隅にたっている。

御柱祭は7年ごと、寅と申の年の春に行われる行事。諏訪大社4社の社殿四方にそれぞれ4本の柱を立て、宝殿を建て替える行事。

真冬の深夜、ズズーンと地響きのような音が不気味に響き渡り、翌朝氷結した湖面に一本の氷の盛り上がった道ができている。これが諏訪湖名物”御神渡”。諏訪大社上社と下社を結ぶ線上にできることが多い事ため、昔の人は男神が女神のもとに通った”御神渡”と考えた。

今回は上社本宮と下社秋宮を訪ねた。

上社本宮は深い木立の中に立つ、荘厳な雰囲気のある神社であった。

下社秋宮は拝殿には巨大なしめ縄がかかっており賑やかな雰囲気をかもし出していた。

いずれにしても、重厚な木造の建物は深い歴史を偲ばせる。

諏訪家の宮家としての伝統、諏訪頼重の無念、諏訪御寮人の神秘さ、勝頼の人間性が創造できる諏訪地方の全てを凝縮している神社であると思われた。



上社本宮 御柱



上社本宮



下社秋宮

#### 【4】武田家滅亡の背景とその場面

##### (1) 武田家滅亡の主原因

勝頼滅亡の原因は守、成をきらって、みずから新しい創造者をめざしたことに尽きる。

武田家の跡取りになるか、それとも諏訪家を再興するか、についてはきちんとした考えを持ち実行していなかった。両方共曖昧。

信玄は、おれの跡は勝頼には継がせない。跡を継ぐのは勝頼の息子信勝だ。

それも十六歳になった時に相続させると勝頼には武田軍旗の使用を禁じた。

武田家の滅亡の原因の一半は信玄そのものが負わねばならないと考えられる。



## (2) 滅亡の場面

1582年3月3日、新府城に自ら火を放ち、郡内に向った武田勝頼一行は、はじめ従う者120名という。

2月29日、勝頼と義兄弟の穴山梅雪（信君）はずでに徳川軍に降伏し敵方についている。

武田軍の暗雲は低くその他の武将も日ごとに脱落し、3月10日駒飼村について勝頼主従は男女あわせてわずか60名といわれている。

ここに至り武田家の命脈はつき、落命はときの問題であった。すでに戦闘能力は喪失し、とうてい岩殿城にたてこもり、織田、徳川の10万余の大軍を迎え討つ力はなかった。

昨日まで生死をともに戦ってきた小山田信茂は、郡内にもどり家臣団と評議の結果、この大軍を前に祖先伝来の我が領地郡内を戦火から守るにはともに戦ってきた親族勝頼とたもとをわかつより、方法がないと決断した。

小山田隊からの迎えを待つ、勝頼一行は笹子峠に物見の兵を出した。

しかし城戸の向こうから銃声を聞き、このことを勝頼に報告した。勝頼はその確証を得ずして信茂の離反と断定し、岩殿城に行くことを断念、祖先信満のねむる天目山棲雲寺にむかったが敵軍にはばまれ田野の地に引き返し、3月11日、清和源氏の流れをくむ、新羅三郎義光より21代、500年に及ぶ名門武田家は敵軍の包囲の中、この田野において一族自刃という悲劇な終りをとげた。このとき笹子峠頂上より銃撃したのは小山田とも織田の一隊とも定かではない。混乱の世の一瞬のできごとであった。

勝沼 大善寺 （勝頼討ち死に一日前滞在した叔母のいる寺）

つつじがきれいな入り口を通ると100段の石段がある。圧倒されそうな重厚な山門をくぐる。両脇に二体の仁王がこちらを睨む。石段は相当古い。上りきると薬師堂がある。さすが718年からの伝統があり重い。

中に入る。薬師如来像がいる。

その両側には国指定重要文化財十二神将。すごい！さる、いぬ・・・を表した仁王が十二体。初めて見た。よく見るとそれぞれの特徴を表している。

さすが国宝すばらしい。

勝沼にこの様な荘厳なお寺があったとは！

勝頼討ち死に一日前滞在した叔母のいる寺である。何故か悲しい。



大善寺 山門

### 大和 栖雲寺（勝頼一行が最後に向った寺）

1348年業海本浄弾寺が開山した禅寺。

帰国後武田家の招聘によりこの寺を開いた。

武田家の信望が厚く、境内には武田信満の墓、その他多くの文化財がある。

勝頼一行は笹子峠で小山田信茂に反逆されて進退きわまり、上杉禅秀の乱で敗れた武田信満の菩提寺栖雲寺をめざそうとした。

景德院と違って悲壮感はなく、普通の山寺である。

人だれ一人いなく閑散としている。



甲斐大和 景德院 (勝頼自害の地)

とても静かな雰囲気のある寺である。

何故か悲しい。

勝頼、北条夫人、信勝の三体の墓はそれなりに大きいがとても悲壮感あり。

五十名の死。死の予感がする。鳥肌がたつ。

「黒髪の乱れたる世ぞ果てしなき

思いに消えゆる露の玉の緒」

北条夫人辞世



山門



勝頼・北条夫人・信勝の三体の墓

## 【5】小山田氏について

### (1) 小山田氏とは

小山田氏の始祖は桓武天皇である。その子孫が関東八平氏（千葉、秩父、上総、三浦、土肥、大庭、梶原、長尾氏ら）の祖となり、その脈流の武蔵七党（秩父氏を祖とする葛西、江戸、豊島、川越、津久井、和田、小山田氏ら百余の氏族という）の一党小山田荘（現在の町田市上小山田町）別当小山田有重の六男、六郎行幸が父の領地都留郡田原荘を賜って、1192年都留に赴任したのが始まりという。

その後の小山田氏や岩殿山の歴史的資料は少ない。

これは武田氏終焉に当たり、その全責任を小山田氏に転嫁するという湾曲された歴史が四百年近く続いたためだと言われている。

### (2) 功績

小山田氏の功績の中には、はた目で痛快な業績が多いが、そのほとんどはあまり世間の評価を得られていないまま無視された感がある。

岩殿城開城。天下の名城、岩殿城に目を向け、戦国期直前に開城した。

小山田氏の先見性は見事である。甲斐国の東方の防衛拠点として近国を監視続けた効果は大であった。敵国の侵入を許すことはなかった。

南対岸に大月台地があり、現在この台地全体を大月市賑岡町というが、この地域は多くの城に係わる物語を伝え、岩殿城による栄華を偲ぶ。史跡や寺院の建立、再興、改修、更には武具の保存や落城の様子を伝えている。

稚児落し伝説は敗戦の悲話で長く地元の人々に語り伝えられた。

信有は強瀬に全福寺を建立した。信有は北富士地方三十六郷社にご神力を三島神社の神前において作刀したもの、この年の秋口八月頃であった。

1550年勝沼大善寺を小山田氏一党が願主として大修繕を敢行した。現在残る大善寺本堂はこの時のもので、優美で均斉のとれた日本建築は山梨県一番の国宝である。

1552年義信、今川氏お姫を迎える。これが前項で述べた様に武田家の運命を大きく左右することになる。黄金の太刀で富士川に出迎え。黄金の太刀は相当な財力のある武将を意味する。

この頃信有は不治の病により、旧来からの小山田家菩提寺住職が靈験あらわな岩殿山七社に出向して加持祈禱をしたものである。

信有は天文21年1月23日逝去した。郡内の人口五万人の内一万人が葬儀に参列した。

人は死去してその真価が問われ惜しまれるという。郡内中の素朴で偽りのない人々の心が自発的にそうさせたものである。

### （３）円通寺再興

北富士地方は800年富士山の大噴火により、大月市周辺まで火山灰が飛来して農作物や住居は倒壊し、人々は恐怖と生活不安におののいた。

朝廷はこの惨状を救い、北富士地方の平穩のために三嶋神社の建立を命じたと言う。806年、大月の地域に三嶋神社、岩殿山円通寺、宝鏡寺、稲村、諏訪神社などを建立した。

小山田氏は1520年岩殿山七社権現や円通寺の七堂がらんを再興した。長い歴史を秘めた円通寺の旧跡を今辿ることは難しい。

### （４）岩殿城築城

1510年開城。郡内領主三代の居城。

以後1582年、武田、小山田滅亡までの70余年間、戦国期中名城として機能する。標高634m全山が岩殿レキ岩（海底に堆積された砂利の集合体）名城にふさわしく威厳に充ちた城姿は見る人の心をうってやまない。

### （５）小山田氏の財源

富士講道者の関銭からの収入が主要なもの。

1500年は十万人ほど有（庚申の年で六十年に一回）

小山田氏財政はかなり裕福であった。

### （６）最後の城士 小山田信茂

勝頼と又従兄弟になる。勝頼より七歳上。

武田勢の中で最強の軍団。

信茂は育ちが良く学もあるが、単なるインテリジェントではなく、大いなる胆力を有する人物であった。

謀反では「都留郡内守護」という独立自尊の血が突然騒ぎ出した。

### (7) 郡内を救った小山田信茂

信茂はこの一事をもって、武田家を滅ぼした謀叛人であるといわれるが、これ以前すでに諸将は離反して、信茂はむしろどたん場まで行動を共にしている。信茂の離反により郡内は織田、徳川軍一兵の侵略もなく混乱と戦火から守られた。また小山田軍数千に及ぶ兵員の中から戦犯者も出さなかった。これは小山田氏と徳川氏の「郡内不犯」の条約からだとされる。徳川氏は小山田氏なきあと隣国北条、上杉などの外敵にそなえそなえ勇猛な郡内武士団の再利用をすでに計算していた。

3月24日織田信長の命により、小山田一族は府中善光寺において処刑されたが、郡内は平穏な日を迎えることができた。これは史実に残るすばらしい終戦の処置で、おのれは死すとも祖先伝来の自国領民を救った郡内守護としての、人間小山田信茂の姿であり、単に逆臣とはいえない。

現在、小山田一族の墓は甲府善光寺裏方200mのブドウ畑の中にりっぱな塚として残されている。

#### 甲府 甲斐善光寺 (小山田信茂 自害の地)

1558年、信玄により建立。

川中島の戦いで信濃善光寺が兵火にかかるをおそれ、本尊をはじめ、諸仏、寺宝が甲府に移された。

僧侶、職人、商人も伴い、古文書は「一つの門前町が移動した」と伝えている。

境内は広く、いろいろな文化財が点在している。

本社は大きく立派である。



## （８）信茂自害後の一族

1582年3月11日、武田氏が田野において自刃し、小山田氏も20日甲府善光寺の露と消え、岩殿城に残った一族一党は三々五々姿を消したのであろう。しかし、身分や名のある武将や婦女子は身を隠すすべもなく夜陰にまぎれ、兜岩から稚児落し岩壁方面へと逃げた。追跡の敵兵の探索は厳しく、夫人は止むなく涙ながらに子どもを岩窟に投げ、その場を去ったと言う。最後に子どもに末期に水を飲ました所を水くれ堂という。

夫人はツヅラを置き去った峠をツヅラ峠という。夫人は北東の郷古和田東光寺に身を寄せ、静かに世を去った墓は最近までこの寺にあったという。

岩窟に置き去られた稚児は立派な鎧兜を身につけていたが、浅利の郷で成人したという。

今のこの伝説の道は陰しく、鎖場の道であり五百年たった現在も人々の心に残る岩殿城の物語である。

「稚児」という名称はこの北富士地方は縁のない言葉で、領主級の子供だけに用いる敬称でしかも、この地方の人たちにはなじみのない言葉であった。

## 【6】岩殿城下について

### （１）岩殿山周辺の地質

約2千万年前は海底だった岩殿山。

長い間洗われた小石が直径1cmぐらいの球状になり、海底に堆積されたレキ層が褶曲作用による圧力や海底火山により高温のため、現在のような硬レキ質となり、長い年代にわたり行われた地殻変動で次第に隆起し、周辺が陥没や断層を起こし、険しい岩壁を形づくった。

約20万年前、古富士山や南八ヶ岳火山活動が活発となり、ローム（火山灰）が積もってローム層を形成した。

一万年ほど前、神富士山活動の終わり頃、比較的大規模な噴火があり、その時の溶岩流が猿橋まで達した。

### （２）相馬将門伝説

郡内が単なる山間へき地というより、藤次の頭目がつねに非常時を予想し、避難の地を定めていたと感じる。

平安時代、岩殿城末麓に関東一円を勢力下におさめた円通寺が栄えていた。

円通寺は806年行基菩薩の開山と伝えられる。

円通寺が関東一円をカスミ場として栄えていた頃、相馬将門も関東を制圧をほこり、中央政権に反抗し、自ら所領と称していた。

円通寺も当時、将門の帰依や支援を受けていたと思われる。



相馬氏の始祖は桓武天皇。

将門の里は集団ではやてのように走りぬける夙爽たる新戦法の騎馬戦によって威をふるい、朝廷軍に徹底抗戦を続け、関東を支配し新星と名乗った。

小山田信茂はある時は一千騎ともいう騎馬集団の育成には将門一族の指導による基盤作りがあった。これが武田軍の主力となる。

相馬平常門は将門の二男で始祖は桓武天皇。

上和田に移り七男二女をもうけた。

これらの行動はいつも岩殿城円通寺の指示だった。

### (3) 岩殿城の総構え

戦国期のはじめ大月市周辺では何回となく北条氏や上杉氏と合戦があり強瀬などは戦場となった。

しかし、郡内守護小山田氏は難攻不落を誇る岩殿城をたてに善戦した。

畑倉は岩殿城大手門に通じていて、岩殿城の城下町であった。

浅利は岩殿城に一番近いところから、昔より城下の住居や武将の館があったといわれる。

岩殿山円通寺は信有が1527年岩殿城開城以前により関東における有数の霊山として、中腹の七社権現堂を中心として、9世紀頃栄えた密教修験道場であり多くの行者を集めた。

戦国時代の武将は神仏を強く信仰し、城そのものを神域としている例が多い。

岩殿山七社権現堂を根じろに全国から集まった修験の行者、山伏たちは小山田氏の庇護を受ける。小山田氏は修験の行者、山伏たちを味方につけ、謀報門者として諸国の情報を収集したりした。

また、道もない険しい山岳戦の案内役や合戦場でのホラ貝による合図や信号、連絡など小山田軍の強力な戦力として修験者は活躍した。

江戸時代となり岩殿城は甲州街道の守りの拠点として、末は上野原の諏訪の関より西は笹子の間まで郡内甲州街道を監視する態勢をとっている。

江戸幕府が緊急に備え、甲府に避難する場合、小仏峠と笹子峠を閉鎖する事により岩殿城を中心とする一大城塞となる。

### (4) 岩殿城と在地豪族

小山田氏が都留郡全域に勢力を持つようになったのは室町時代初期の1393年頃の小山田弥次郎の代である。

小山田氏の勢力を支え、威信を磐石の強さにしたものに各郷の地頭や名士、一般大衆が多かった。大衆はふだん農耕に従事する農民である。名主は連絡を受けると配下の郷にふれを回し集合を命ずる。

### 5) 小山田氏の治績

災害と侵略の続く郡内地方。

山くずれや雪しろ水、地震、噴火、冷害などの異変や天災による飢餓者、または疾病による死亡者などの記録が多く、郡内地方の不安定な民衆の生活様相がうかがえる。この他、郡内はしばしば武田氏や今川氏、北条氏、上杉氏などの侵略を受け、そのたびに農民は生産力のとぼしい農地を戦場として荒され、さらに陣役に徴発されるという三重苦の負担を強いられた。

このように極端に疲弊したとぼしい世相のなかにあった郡内衆が次第に頭角をあらわし、戦国期には武田軍の主力として戦力を支えた。

### (6) 残された郡内武士団

1582年3月、小山田氏は武田氏に続き甲斐府中善光寺の露と消えた。

小山田氏の最後は悲惨だった。

在世の栄光や武勲はいっさい評価されることなく、また語られることもなく反逆者としてその汚名だけが強く残った。

しかし小山田氏の領内統治力は戦国の混乱期にもかかわらず善政をつくし、この地にあたらしい文化の導入、産業経済の振興、交通や鉱山の開発などにすばらしい多くの業績を残した。

江戸幕府の治政下、郡内地方は90パーセントに及ぶ苛酷な税制によりいくたびなく農民がいのちをかけて農民一揆がおこるが、そのつど指導者は小山田時代の在地豪族や名手であり、戦陣方式の旗をたてホラ貝を吹き、太鼓や鐘で合図をするなど統制ある集団行動により、小山田氏時代の税制復帰を強く要求した。

## 大月 岩殿山

山頂岩殿城跡まで約三十分。

相当厳しい山道を登る。

関東三名城の一つ。攻めにくく守りやすい。

当時、小山田氏の功績。

築城にあたっては相当の労力と費用が掛かっていると考えられる。

何故この様な険しい山の山頂に城を築いたのか？

確かに360度周りの山が伺える。すぐそばに富士山。相模の山々。

のろしの拠点としても有名。

十世紀に建てられた円通寺との関係も大きく影響される。

いずれにしても、この岩殿山築城とその運営が小山田氏及び郡内大月市民を知る鍵になると考えられる。



市街から岩殿山を望む



山頂から市街、富士山を望む

### 【7】大月市民の特性について

大月市民は歴史的にエリートでレベルが高いと考える。

桓武天皇を始祖とする相馬将門の血を引く。

また、一時は武田家と同等の実力を持つ小山田家の血も引く。

小山田信茂が自害した後、その直系は稚児落しに残された稚児は浅利の郷で成人したという。浅利には小山田直系の血が流れているのである。

もし、武田信玄が天下を取っていたならば、小山田氏は第一の重鎮。

大月市民から大久保利通や西郷隆盛級の政治家を輩出していたかもしれない。

また、平安時代には岩殿山末麓に関東一円を勢力化におさめた円通寺が栄えていた。

大月は関東の名門の円通寺があったことから仏教伝統の地でもある。

今回、武田家直系信虎、信玄、義信と諏訪の血を引く勝頼は明らかに人種が異なる。また、同じ甲斐の国の小山田家系信有、信茂も武田家と大きく性格が異なる。武田24将が個性的軍団であったことから同じ山梨でもまったく異なる人種と言えるのではないだろうか。

毎年甲府で行われる信玄公祭りでは24将の出身地から大勢の騎馬隊が駆けつける。大月の人たちも参加するが、もう一つ元気がないように思われる。

やはり小山田信茂が最後勝頼を裏切ったという後ろめたさがあるのかもしれない。しかし、この件は他諸将はすでに離反した後で信茂は最後まで行動を共にしている。むしろ他諸将の方が罪が重いのではないかと思われる。

また、信茂は最終的には処刑されてしまうが、己の身を差し出して自国領民を守ったと考えられる。

大月市民は歴史的にエリートでレベルが高い。

**【8】最後に**

自分の住む大月を第三者的に歴史的背景から考察した。  
大月がここまで歴史的に深い土地柄であることにたいへん驚いた。  
甲斐の東半分の文化を担ってきている。

地元大月の鈴木美良先生（元大月市中学校校長）は多くの本を出され、小山田氏や岩殿城の歴史的考察を積極的に紹介されている。

今回、全面的に参考にさせていただいた。

大月市民はどこまで自分たちの歴史を知っているのだろうか？

大月市民は歴史的背景から自分たちのことを山梨の中であるいは日本全国で大きく胸を張って良いのではないだろうか！

最後に、テレビ局または映画会社に小山田家の歴史ドラマ制作を提案する。

**【9】参考文献**

- ① 小山田氏と岩殿城 鈴木美良  
2008年8月25日発行 山梨ふるさと文庫
- ② 名城岩殿城と小山田氏 鈴木美良  
1986年6月25日発行 サンニチ印刷
- ③ 甲州・武田一族衰亡史 高野賢彦  
2003年1月25日発行 新人物往来社
- ④ 武田二十四将伝 坂本徳一  
1980年3月25日発行 新人物往来社
- ⑤ 武田勝頼のすべて 芝辻俊六・平山優  
2007年1. 25発行 新人物往来社